

せんご ねんへいわ きねんじぎょう
戦後70年平和祈念事業

せんそう きおく じせだい こうきゅうへいわ けいしょう
戦争の記憶・次世代への恒久平和の継承

しみん かた せんそう ひばくたいけんきろくしゅう
～市民が語る戦争・被爆体験記録集～



ね や が わ し
寝屋川市

へいせい ねん がつ
平成27年7月

はじめに

世界の恒久平和と核兵器廃絶の実現は、全国民共通の願いです。

しかしながら、世界に目を向けますと、いまだに地域紛争やテロによって、多くの命が犠牲となるなど、深刻な状況が続いており、加えて、大量の核兵器が存在し続けているのが現状です。

寝屋川市は、昭和58年（1983年）3月に「非核平和都市宣言」を行い、この宣言を踏まえ、「恒久平和を願う市民のつどい」の開催や「平和のバラ」普及事業など様々な非核・平和啓発事業等を推進し、平和意識の高揚を図っています。

本年は、戦後70年という節目の年を迎えます。戦争を体験した市民の方々が年々少なくなる中で、我が国が体験した悲惨な戦争の記憶を決して風化させてはならないとの強い思いから、市民の方々の証言や手記を基に、戦争・被爆体験記録集を作成しました。

本書を通じて、一人でも多くの市民の皆様が、改めて「戦争の悲惨さ・残酷さ」や「平和の尊さ」について考えていただき、悲しみの歴史を二度と繰り返すことのないよう、次世代に語り継ぐ一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発刊にあたりまして、ご協力いただきました多くの市民並びに団体の皆様に心よりお礼を申し上げます。

平成27年7月

寝屋川市長 北川 法夫

目次

(あいうえお順に掲載)

1. 青空 <small>あおぞら</small> に一筋 <small>ひとすじ</small> の飛行機雲 <small>ひこうきぐも</small>	岡野 <small>おかの</small> 健 <small>つよし</small>	3～7 ページ
2. 焼きつくされたあの日 <small>ひ</small>	小谷 <small>おだに</small> 滋彦 <small>しげひこ</small>	8～15 ページ
3. 運命 <small>うんめい</small> の人生 <small>じんせい</small>	高野 <small>たかの</small> 富美子 <small>ふみこ</small>	16～19 ページ
4. 悪魔 <small>あくま</small> の原爆 <small>げんぱく</small>	永野間 <small>ながのま</small> 千栄子 <small>ちえこ</small>	20 ページ
5. 被爆 <small>ひばく</small> させられた家族 <small>かぞく</small>	檜山 <small>ひやま</small> 苓子 <small>ふきこ</small>	21～23 ページ
6. 戦後 <small>せんご</small> 70年 <small>ねん</small> を想う <small>おも</small>	森 <small>もり</small> 令子 <small>れいこ</small>	24～26 ページ
7. 終戦 <small>しゅうせん</small> の頃 <small>ころ</small> の「あの日 <small>ひ</small> 」	山川 <small>やまかわ</small> 美英 <small>よしひで</small>	27～31 ページ
8. 被爆 <small>ひばく</small> 70年目 <small>ねんめ</small> を迎えて <small>むか</small>	山下 <small>やました</small> しのぶ	32 ページ
参考資料 <small>さんこうしりょう</small>		33 ページ

・非核平和都市宣言ひかくへいわとしせんげん

・平和の塔へいわとう

・寝屋川市誌ねやがわしし

・平和のバラへいわ

・語句説明ごくせつめい

あおぞら ひとすじ ひこうきぐも
青空に一筋の飛行機雲

おかの つよし どうじ さい
岡野 健 (当時 15才)

いんのしま たくむら こく민がっこうじんじょうか お ひろしましみなみせんだまち しゅうどうちゅう
因島田熊村の国民学校尋常科を終えて、広島市南千田町の修道中
がっこう にゅうがく きしゆくしゃ はい どうじ ちゅうがく ねんせい へいきほきゅうしょう
学校に入学、寄宿舎に入った当時は、中学3年生になると、兵器補給廠
がくとどういん きんむ
に学徒動員で勤務していました。

けいほうかいじょ おくがい ひじょうぐち つく かきね じょきよきぎょう
警報解除になり、屋外で非常口を作るため、垣根の除去作業をして
いました。雲一つない青空に一筋の飛行機雲を見て、その先端のB29
くもひと あおぞら ひとすじ ひこうきぐも み せんたん ビー
を見た瞬間、ピカッと閃光が走り、耳と目を両手で塞いで伏せました。

ばくだん おちた とき しょうがっこうどうじ おし
爆弾が落ちた時にどうするかは、小学校当時から教えられていました。

からだ あつ ゆび すきま みぎ
だんだん体が熱くなるので、そうっと指の隙間からのぞくと、右から
ひだり あお だいだいいろ ひかり なが め かやく こ
左に青いような、橙色のような光が流れるのを目にしたので、火薬庫

ばくはつ おも た あ じつ ほうしゃせん いっすんさき
の爆発かと思ひ立ち上がりました。実は、これが放射線でした。一寸先

み きり なか すうびょうかん おとひと せいじゃく まえ み
も見えない霧の中、数秒間、音一つない静寂。前が見えるようになると、
ひめい ち ひと ひと
悲鳴と血だらけの人、人。

て こう あたた かん み ひだりじょうはんしん こぶしだい みず さ
手の甲が温かく感じたので見ると、左上半身、拳大の水ぶくれが裂

ひ ふ た からだぜんたい
けて、皮膚が垂れていました。そのうち、体全体がカッカ、カッカと

うず ひじやま ふもと よこあなぼうくうごう ひなん
疼きだします。比治山の麓の横穴防空壕に避難すると、ひんやりして

うず やわ な うず きゅうゆう さぎょうふく
疼きが和らぎましたが、慣れるとまた疼きます。級友が作業服であお

い でくれました。やけど あぶら さが い きびど
いでくれました。火傷には油がよいと探しに行きましたが、錆止めの

おうきゅうてあて うず
グリスしかなく、それで応急手当をしてもらいました。疼きがいくら

やわ ころ きょうし れんらく いえじ
か和らいだ頃、教師からの連絡で家路につきました。

へいきほきゅうしょう たてもの あか がいかん いじょう
兵器補給廠の建物は赤レンガで、外観に異常はありませんでしたが、

いっぼそと で かおく かべ お かたむ きゅうゆう
一步外に出ると、家屋は壁が落ちて傾いていました。級友とあちこち

み ばくだん あな み あ でんせん おも
見ましたが、爆弾の穴が見当たりません。電線がショートしたのかと思

へいたい ぼこひと おお せんかんやまと ごうちん
いました。「いや兵隊がマッチ箱一つの大さきで戦艦大和が轟沈するの

ができたから日本は負けないと言っていた」と言いながら、被服廠を通り、専売局の通りに差しかかると、状況は一変しました。

今までとは違い、男女の区別も分からない焼けただれた人、うずくまっている人。驚いて御幸橋の袂に近づくと、更にひどい。川からの風が疼きを癒すのか、橋の上は人でいっぱいでした。橋を渡ると御幸橋駐在所で、左が学校ですが、右に曲がって大叔父のいる舟入川口町へ行こうと思って、鷹野橋に向かいました。南に向かう人は更にひどく、幽霊のように、むけた皮膚をぶら下げ、電車は焦げていました。爆発の中心は鷹野橋方面と判断して引き返し、高等工業専門学校の疎水道に沿って学校に向かいました。二階建てが一階になって傾いていました。グラウンドの先の寄宿舍の壁はなく、部屋に入ると天井がありません。押入れは無事でした。

裏の海岸べりの帝人工場の出火も、三菱造船から帰った4年生が消火したと聞き、疼きも安らぎホッとしました。朝から一日大変でした。太陽は見えないですが夕焼けは綺麗で、眺めていた時、背後から呼びかけられました。振り向きましたが誰だか分かりません。「誰…」

「壮一郎です。やられました」と言われて分かりました。顔が火膨れして、目は糸のよう、口はタコのように、背骨のくぼみにシャツの焼け焦げが残っているだけ。小学校の同級生で、病気のため1年遅れで入学しました。彼の話では、帰省しての帰りに汽車の遅延で広島駅に当日早朝着き、強制疎開家屋を整理する作業場（雑魚場町付近）に直行したそうです。ピカッの閃光の後、真っ暗闇になって、あっと思った瞬間、前の女学生の髪がボッと燃えたそうです。宇品港に避難しましたが、兵隊から、火傷した者は以島に運ぶと言われて怖くなり、帰って来たといひます。「明日は一緒に島に帰ろう」と言って、防空壕に寝かしました。夜になって風が終わり海風になる頃から、南西から北東に向かって火の手がだんだん大きくなり、一晩中燃え続けました。幸い

みなみせんた かいがんせんたんちか ひ は き
に南千田の海岸先端近くだけ火は来ませんでした。

よくあさお い だれひとりた あ しゃかん そうだん
翌朝起こしに行くのと、誰一人立ち上がりません。舎監と相談して、
じぶん しま かえ うじなこう ふね まわ たす
自分が島に帰り、宇品港に船を回してもらって助けるしかないという
ことになりました。えいごたんどう しゃかん のど かわ みず の
英語担当の舎監は「喉が渴いても水は飲むな。飲ん
だら死ぬ」と言いました。

みゆきばし ところ きのう ちが みわた かぎ いち
御幸橋まで100メートルほどの所が、昨日とは違って見渡す限り一
めん や のはら きょうばしがわ つつみ ほくじょう あしもと
面の焼け野原になっていました。京橋川の堤を北上すると、足元には、
まるで火膨れのマネキン人形の連続です。逃げ遅れた人が爆風で下敷
きになり、家屋の柱やタンスが燃えています。川向こうの比治山の麓
は焼けてなくて「兵隊さん、助けて」の声でしたが、こうしん
は焼けてなくて「兵隊さん、助けて」の行進している
へいたい ひろしまえきほうめん い
兵隊は広島駅方面に行っていました。

さいじょう いちばんれっしゃ かいたいちえき き ある き
西条から一番列車で海田市駅まで来て、そこから歩いて来たという
ねんせい ほごしゃ あ たが じじょう はな きしゅくしゃ どうきゅうせい
2年生の保護者に会いました。互いに事情を話し「寄宿舎に同級生が
いるので聞きなさい。わたし ひろしまえき ごうせん そ かいたいちえき
なので聞きなさい。私は広島駅でなく、2号線に沿って海田市駅に
いきます」と言って別れました。かん
乾パンをいただきました。

おのみちえき つ ふなびん しゅうりょう ひがし そら ま か
尾道駅に着くと、船便は終了していました。東の空が真っ赤で、
ふくやまし も しんせき いえ い むらかみびょういん い
福山市が燃えていました。親戚の家に行き、村上病院に行きましたが、
ひろしま きゅうえん い ふざい ろうせんせい ちりょう じょう
広島に救援に行っていて不在でした。老先生に治療していただき、上
はんしんほうたい みぎめ のこ すがた
半身包帯で右目だけ残した姿になりました。

よくじつ いちばんせん そういちろうくんたく た よ じじょう はな きゅうえん ねが
翌日、一番船で壮一郎君宅に立ち寄り、事情を話して救援をお願い
し、ちゅうがっこう しょうかい てら い ふね たの きたく
し、中学校を紹介してくれたお寺に行き、船を頼んで帰宅しました。

きたくご ど こうねつ はげ げり すうじつかん きおく
帰宅後は、41度の高熱と激しい下痢で、数日間の記憶がありません。

かれ きゅうえん ざんねん にちごろあいつ な
彼らは救援されましたが、残念ながら13日頃相次いで亡くなりました
た。「おかげで家で亡くなった」と言われたのが、せめてもの救いでし
た。

きしゅくしゃ どうそう むらかみまさしくん ひらやまいくおがはく ま え とく
寄宿舎で同窓の村上政志君は平山郁夫画伯にも負けないほど絵が得
い せつけいしゃ けんりつこうぎょうがっこう にゅうがく ほね み
意で、設計者になりたいと県立工業学校に入学しましたが、骨も見つ

かりませんでした。八丁堀付近の電車の中で被爆し、奇跡的に怪我も
なかった円光君が、年末には後遺症で亡くなりました。消防団長で救
援活動をした母方の叔父は、10年後に後遺症で亡くなっています。こ
のように直接被爆だけでなく放射能被爆のあることを忘れてはいけま
せん。

被爆者は今も癌などの後遺症に脅えての生活です。戦争があったか
ら原爆が落とされました。放射能の被害はいつまでも人を苦しめます。

次世代の人たちに体験を語り続け、理解していただけるよう努力す
るのが、生き残った被爆者の使命だと思っています。

被爆して70年にあたり、広島市の旧制の中学3年生で学徒動員で
被爆した1人としての思いを記録しておきたいと思いました。

70年が経つと被爆した人も、見聞きした人も、いろいろな関係で
変化してきているように思います。

左上半身を焼かれたことよりも、家族のもとに帰るべく広島駅に向
かう途中、助けを求める市民の声を聞きながら、兵隊の列は止まるこ
となく広島駅方面に消えたのを見て、軍隊は市民を守るのではなく、国
を守るのだと感じ、これが私の戦後70年の原点になったと思います。

生まれ育った村は、温暖で南向きのミカン、除虫菊、美味しい薩摩
芋、麦の産地でした。漁師は居ませんでした。午前には隣の町から
来た魚屋さんが調理して翌日の意向を聞いて帰り、造船業も盛んで
日立造船をはじめ、ミカン船なども盛んで豊かな島でした。

戦後は立命館大学の理工学部化学科を経て研究、開発、管理等の平和
産業に携わりました。

大学の同期会に在籍していた人と、東海村にて原子炉の安全性や放
射能の処理について議論していますと、彼と一緒に赴任していた教授
が、「君は被爆者だから心配するが、今の技術では絶対安全に設計され
ている」と言いました。「絶対は無い」という反論に、末川総長が「多

いに議論しろ」と言われました。しかし、原子炉の破壊で神話は崩れました。

寝屋川市では、当時の市長の配慮で中学同期入学の平山画伯の「歴史に生きる」を借用して「核兵器廃絶求め歴史に生きる」という石碑を建立しました。

2015年4～5月には、国連のNPTに「ヒロシマ・ナガサキ8月のあの日 寝屋川・被爆者からのメッセージ」の和文と英文の記念誌を携えて、寝屋川市原爆被爆者の会から4名派遣しました。

「寝屋川市広長友の会」のニュースで「心は若く、楽しく、美しく」をかがけ、語り部として生きています。

大阪府下では平和行進、裁判傍聴を行い、一番仲の良い被爆者の会です。

多くの援助で、認定被爆者は「被爆地点が爆心地から2.0キロメートル以内」が「同3.5キロメートル以内」になり、私は、同2.5キロメートルで被爆者認定されました。

＜初本町公園内に建立された核兵器廃絶の石碑＞



焼きつくされたあの日

おだに しげひこ どうじ さい
小谷 滋彦 (当時 14才)

しょうわ ねん ねん しょうがつ かどまつ み まちかど
昭和20年 (1945年) 正月、門松ひとつ見あたらない街角は、やたらと国民の敵愾心を昂揚させるポスターだけが寒風に舞い、「玉砕」という美辞麗句に代わって「鬼畜米英」という新語の見出しが目立つようになった。

がつ たち がくとどういんれい ひだりそで ひろしまけんがっこうほうこくたいひろしまいちゅう
2月1日、学徒動員令により、左袖に「広島県学校報国隊広島一中」と書いたラベルを縫い付けて、軍需工場関西工作所 (現・舟入川口町) へ向かった。

ねんせい わ がつきゅう たんどくこうどう
5クラスある2年生のなかで、なぜか我が18学級だけの単独行動となり、他の組は市外東部の東洋工業 (現・マツダ) へ動員されたことが、「あの日」の運命を左右することになる。

こうじょう しりつじよがっこう どういん ひと としうえ せいと
工場には、すでに市立女学校から動員された一つ年上の生徒たちが汗を流していた。

かのじよ ふく はなもよう あか
彼女たちはセーラー服にモンペだったが、モンペの花模様にも明るく、おお おお せんじちゅう くふう しゃれ たの
ものが多くみられて、戦時中とはいえ工夫してお洒落を楽しもうとする心遣いが、殺伐とした空気を和やかなものにしてくれた。彼女たちの体力の消耗を補い、一日一刻がお国のためだと思って頑張った。

がつ がくもん ていしん まぎ げんじつ ひ ねんせい
4月、学問よりも挺身という紛れもない現実を引きずって3年生になった。

くうふく かか きたく はいきゅう しょくりょう とぼ ゆうしょく き こめ
空腹を抱えて帰宅すると、配給の食糧は乏しく、夕食は決まって米に水を増して芋蔓を入れた雑炊だった。

しょくご あ そと も でんとう ました だけ て どう
食後は、明かりが外に漏れないように電灯の真下だけを照らした灯火管制のもと、玄米を一升瓶の中に入れて棒で繰り返し突いて、家族が食べやすいように精米をした。

午後9時を過ぎると、決まって、アメリカ機の本土侵入を告げる第一報がラジオから流れた。

「広島市の皆さん、今夜は広島が目標とみられます。日頃の訓練を…」と、励ましとも脅かしとも思えるメッセージに促されて家族4人、足先を庭に向けて仮眠をとった。次のアクションはすばやく防空壕へ潜り込むことだった。暗い壕内は、梅雨期を過ぎてもじめじめとした湿気と夏の熱気が絡まって、息をひそめた時間は長く、息苦しかった記憶が残っている。

それにしても、東京・大阪の無差別爆撃を皮切りに、全国の中小都市までが連日連夜の空襲で焼け野原となり、隣の呉軍港と街も、終戦直前まで6回に及ぶ猛爆で完全に焦土となっていた。

広島は、太田川が街を貫き、水の豊かな美しいところだ。太田川は満潮になれば海魚が川を上り、潮が引けばしじみ貝が採れるほど自然に恵まれ、家の裏にある比治山は冒険を楽しむ少年期の得がたい場所をつくってくれたものだが、当然ながら、広島も警戒警報、空襲警報のサイレンがひっきりなしに鳴り響いたが、今日までなぜか本格的集中攻撃を浴びることなく、不気味さが漂っていた。

やがて、人々の苛立ちと怯えはやけくそに変わった。

「どうせ焼けるんなら、早よ焼いてつかあさい」

「ビクビクしとったら心臓に悪いけん」

「広島にや、アメリカ帰りの二世がようけ住んどるけん、遠慮しとるんじゃろ」

「馬鹿いいなさんな、戦争じゃ。そがいな理屈は通らんけん」

8月5日の深夜も、姿は見えぬがB29の大編隊が近づいたただけだった。敵機は上空を旋回しているのだろうか、近づいては遠ざかり、また戻ってくる気配から、慌てて防空壕へ駆け込むでもなく、ぼんやりと縁側に腰をおろしていた。

今夜もついに一発の爆弾も落とさず、肩透かしを喰らった。繰り返し
の警報は何度も発令されて、熟睡もできずに朝を迎えた。

8月6日は朝から暑かった。

ゲートルを巻き身支度を整えて家を出ると、すぐに警戒警報が発令
されたが、学徒動員で出勤途中の7時30分に解除されて平常に戻った。
工場へ到着すると、いつもとまったく変わりなく8時15分を迎え、そ
して時刻は止まった。

ほっと一息入れたその時、原爆搭載のB29爆撃機は虎視眈々、照準
を定めていたことになるが、広島城地下の軍管区司令部が「中国地方
に警戒警報発令」と発信するまさにその瞬間、原爆は炸裂した。

私は、爆心地から2.1キロメートルの地点で「ピカドン」の洗礼を受
けた。当時、広島一中3年生60人の1人として舟入川口町にあった軍
需工場関西工作所へ学徒動員で出勤していた。

8時の朝礼後、工場内に足を踏み入れた瞬間、目の前に「ピカッ」
と青白い閃光が走った。ウワッと身体が硬直し、激しい突風が製品や
機械設備を薙ぎ倒すように吹き抜けた。それと同時に、粗末なセメン
ト瓦や頭上の物品が音をたてて降ってきた。

慌てて大きな機械の下に滑り込んだ。「やられた、直撃弾だ！」恐る
恐る見廻すと、周囲は埃で暗くてよく見えない。這い出してきた級友
たちの顔は皆真っ黒で、身体全体もひどく汚れていた。なかには、シ
ャツを血で赤く染めた怪我人も数人出た。後でわかったが、2名の者が
落下物で脳内出血死した。

幸い付近に火の手が上がり、工場も倒れず、非常の時の集合場所
に定められていた近くの市立高女(現・舟入高校)の校庭に避難した。

太陽はいつの間にか中天高く、正午近くに感じられたが、空には敵機
の姿もなく、引率の担任教師が解散を命じて、同じ方面の級友2人と
家路についた。重松良典君(広島在住)と岩竹勝君(ハワイ在住。2003

ねん さい せいきよ ふたり ほんかわ ど て のぼ しゅんかん なまつば
年74才で逝去)の2人である。さっそく本川の土手に登った瞬間、生唾
を飲んで絶句してしまった。

それは、街の中心部に舞い上がる黒煙と火柱、そして熱風を肌で感じ
たからである。

ちか み かくみ さかだ まゆ ひ ふ ゆうれい
近くを見ると、髪は逆立ち、眉もなく、皮膚はめくれて幽霊のよう
に胸のところからひょろりと両手をたらし、衣類もボロボロに焼けた
むね せんしんやけど ほだし しゅうだん みち ひろ なに きけ ある
全身火傷の裸足の集団が、道いっぱい広がって、何か叫びながら歩い
て来る。負傷者は江波方面へ続いた。この異様な恐ろしい地獄図に足が
すく わたし あいだ うご
竦んで、私はしばらくの間、動くことができなかった。

き ど なお わたし ある ちゅうしんち すず
気を取り直して私たちは歩きはじめたが、中心地に進むほどその惨
じょう ど きわ どうかい かおく ほのお なか のが ひと だんじょ み わ
状は度を極め、倒壊した家屋と炎の中から逃れた人たちは男女の見分
けもつかず、ほとんど丸裸の血まみれで皮膚が破れたまま、道端にへ
たりこんでいた。

わたし とお す じかんご ふきん いったい くる あめ み ま
私たちが通り過ぎた1時間後に、この付近一帯は「黒い雨」に見舞
われたが、燃え盛る火炎は衰えなかったようだ。

がれき やま よ もとやすがわ か めいじぼし たもと き とき
瓦礫の山を避けながら元安川に架かる明治橋の袂まで来た時、あち
こちで家屋が烈しく燃えはじめ、行く手を塞いだ。ちょうど川の潮が引
くところで、熱気を避けて川底へ逃げた。ところが猛烈な火事嵐が起
こって熱く焼けたトタンや、火のついたままの畳などが舞い上がり、
ところかまわず空から降ってくるのではないか。身の危険を感じた私た
ちは、ほうほうの体で元の路上に戻った。

おおてまちふきん いぜん いきお ま も さか ほのお
大手町付近だろうか、以前よりも勢いを増して燃え盛るわずかな炎
の隙間を見つけ、地を這うようにして鷹野橋の交差点まで出ることが
できたが、逃げても逃げても足元から炎が追いかけてくるようだった。

ねっば ぼくふう めだま と だ ひと ふともも さくろ
そこには、熱波と爆風のため目玉が飛び出したままの人、太股が石榴
のように裂けて「痛い、痛い！」と叫んでいる人、皮膚が垂れ下がっ
て動けない人、防空壕の上で「水、水をつかあさい」と、転げ回る人、

ぼうかすいそう みず もと あたま からだはんぶん しず すがた せいし
防火水槽の水を求めて頭から体半分を沈めた姿は、とても正視でき
なかつた。

また、軌道から外れて鉄
骨だけが焼け残った市内電
車の中に、黒焦げや半焦げ
の死体が団子状態で重なり
あっていた。



キノコ雲の形はくずれでいた
一九四五・八・六・午後
鷹野橋付近

わたし むきず いふく み
私は、無傷で衣服を身に

<鷹野橋付近の焼けこげた電車 (小谷 滋彦・画)>

つけ、布靴を履いて家に帰ろうとしている自分が、たいへん不似合い
だと感じ、思わず「南無阿弥陀仏」と手を合わせて、この場を去ろう
としたが、とても南竹谷町と昭和町を通過して比治山方面へ直行するの
は不可能と考え、鷹野橋を右に曲がって、つまり御幸橋の方に向かっ
た。途中、千田町の広島電鉄本社は、火災が発生したのだろうか、消火
活動が続いていた。本社裏の車庫は屋根板が飛び、垂れ下がった架線が
曲がりくねった鉄骨や倒れた電柱に接触してスパークし、ぱちぱちと
音をたてて火花が散っていた。耳に手をあてて、怖いもの見たさに伏し
目がちで覗き込むと、それはトリックをふんだんに使った花火ショー
のように華麗で壮観だった。

だらだらと緩い坂を登って左にカーブすると御幸橋へ出た。途中、
火災を避けて、うずくまった人や、馬の破裂した腹を跨いだり、倒壊し
た家屋の上を歩いた。御幸橋は、市街の炎から命からがら逃げてきた
人たちが力尽き、へたへたと倒れ込んでいた。

炎天下の橋の上は、海から吹く風を求めて、足の踏み場もないぐら
いごった返していたが、私たちは意を決して、肌を露出した集団の中
を進んだ。すると、無傷であることを不思議そうに見られた。

思わず「すみません、ごめんなさい」と、申し訳なく後ろ髪を引か
れる思いで走った。ふと横を見ると欄干がない。爆風圧によって南側の

らんかん かわ お きたがわ しょうぎだお ほどう たお
欄干は川へ落ち、北側のそれは将棋倒しのごとく、歩道に倒れていた
が、橋そのものは無事で、宇品地区を結ぶただ一つのパイプだった。
みなも すべ きより たいぐん はし うえ み
水面を滑るような細魚の大群が、橋の上からきれいに見られた。

はし わた みなみまち す しげまつよしのりくん わか やねがわら
橋を渡ると皆実町に住む重松良典君と別れたが、屋根瓦とガラスの
はへん し つ みち いえ つづ ある にぶ
破片で敷き詰められた道は家まで続いていて、歩くスピードが鈍った。
いつの間にか陽は西に傾き、長い影が後ろから差し込んでいる。「い
なんじ おも でしおちよう ひふくしょう つうしんたい はさ みち
ま何時だろうか」と思った。出汐町の被服廠と通信隊に挟まれた道も、
ばくふう と しざい さんらん へいたい うおうきおう しゅうしゅう
爆風で飛ばされた資材が散乱し、兵隊が右往左往して収拾がつかない。

ひふくしょう がんじよう あか へき は お うちがわ つよ お
被服廠の頑丈な赤レンガ壁もところどころ剥げ落ち、内側へ強く折
れ曲がった鉄扉を見た。「魔物でも近くに棲んでいるのでは…」と、怪訝
め しゅうい みまわ
な目で周囲を見回した。

わたし ま つづ ち なが ふしょうしゃ ひ なんみん
私たちはいつの間にか、ぞろぞろと続く血を流した負傷者や避難民
む まぎ こ
の群れに紛れ込んでいた。

かすみちよう へいきしやう よこ とお しののめちやう かえ いわたけまさるくん わか
霞町にある兵器廠の横を通って東雲町まで帰る岩竹勝君と別れ、
ひじやま ひがしがわふもと みなみだんばらちやう た つが や たど すがた み
比治山の東側麓、南段原町に建つわが家に辿りつき、その姿を見る
ことができたのは、幸運にも家が風上に在ったことと、山が防火壁に
なってくれたおかげで、えんしやう どうかい まぬが
延焼と倒壊を免れたからだ。

むか ちち ふきそくしゅつきん しゅつきん おおほぼ おく はは い
迎えてくれた父は、不規則出勤で出勤が大幅に遅れ、母とともに居
ま ひばく あね がくとどういん うじな せんばくしれいぶ い とうちやう うじなせん
間にいて被爆。姉は学徒動員で宇品の船舶司令部に行く途中、宇品線
ひじやまえきまえ あ むきず ひじやま すく
比治山駅前で「ピカドン」に遭ったが無傷。まさに比治山によって救わ
れたと言っても過言ではない。家族の顔を見て安心をしたのか、張り
つめていた気がゆるんで、その場にヘナヘナと座り込んでしまった。

あさ の く ばら へ のど かわ い
朝から飲まず食わずで腹が減って喉も渴いていたはずだが、それ
じやう きやういちにち じごくず あつどう しよくく か や えんがわ は
上に今日一日の地獄図に圧倒されて食欲もなく、蚊帳を縁側に張って
ね つか ねつ やる
寝た。疲れていたが寝付かれない夜だった。うとうとしながら8月6日
ひろしま にんげん せい し きかい かみひとえ うす かん
の広島は人間の生と死との境は紙一重よりも薄いものだと感じ、そし
きやういちにち できごと あたま なか よみがえ き
て今日一日の出来事が頭の中にマザマザと甦って来た。

7日、母と2人で富士見町に住む伯母(母の姉)を探しに行ったが見
あたらず、その帰路で多数の死者を街角で茶毘に付している光景に出
会った。

拳を天に突き上げた無念の姿に腹をえぐるような焼ける音と臭い
が、未だに脳裏から離れない。

原爆によると思われる急性症状の貧血、下痢、発熱などが半年ほど
続いたが、それ以上の被爆による身体的傷害はなく、その後の健康を保
つことができた。しかしその心理的衝撃は、それからの私の人生にず
っとつきまとった。

あまりの恐怖感に、封印したくても意のままにならず、独りで苦闘を
続けた。家庭内でも原爆の話はタブーで、外でも避けていた。だから
広島平和資料館へも、子どもの学習に誘われるまで足を運ぶ気持ちに
なれなかった。

原爆投下が正当化され、侵略と加害の責任を忘れようとする動きが
怖い。

広島で焼かれた人たちの無念を想うと、愚行を繰り返してはならな
いと強く思う。

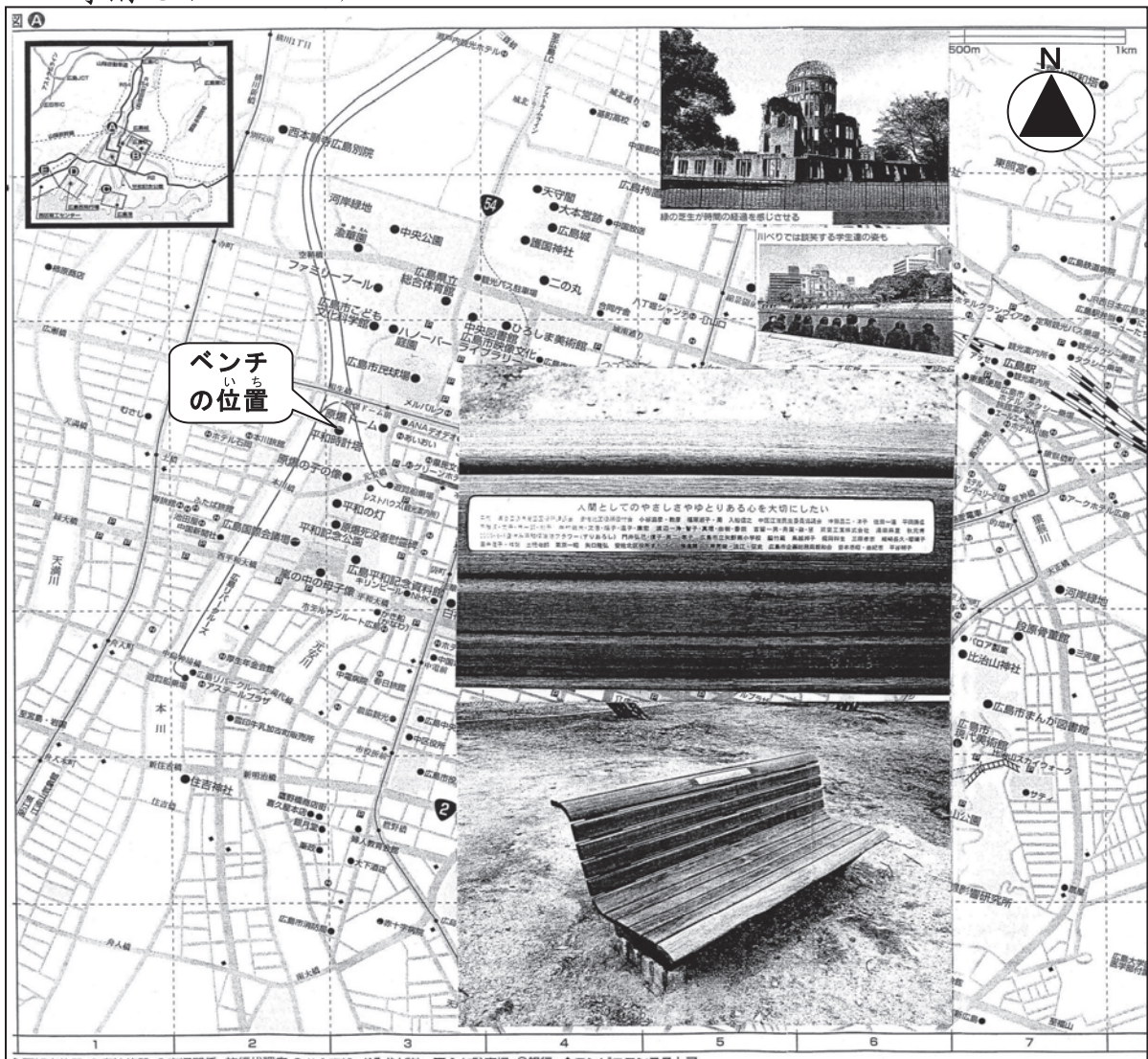
一瞬にして地獄を生み出した「ピカドン」は、非人道的行為の極み
である。被爆70年の今日、次世代や未来の世界に向けて悲惨な事実を
アピールし、戦争が如何におろかしく、無益なものであるか語り継ぐ
ことが、平和を守り続けることの原点ではなからうか。

さて、広島の市内を流れる元安川と本川に挟まれた平和記念公園は
平和の象徴とされる原爆ドームをはじめ、核兵器の廃絶を願って多く
のモニュメントが点在するが、都心という立地と緑あふれる公園とし
てベンチで読書にふける人、川べりで雑談する人、園内をジョギング
する人などで市民の憩いの場として行き交う人々が絶えないことは
承知だと思う。10年ひと昔と言うが、その頃、広島を訪ねた時のこと、

こうえんない せつりつぽきんうんどうがめと きふ しゃしん
 公園内ベンチの設立募金運動が目にとまり寄付をした。写真はそのベンチで、おだにしげひこ ほんにん あつひこ むすこ ふくはらすみこ めい
 ンチで、小谷滋彦（本人）、敦彦（息子）、福原叔子（姪）のプレートがせもたれにうちつけてある。

ねんまえ あさ いっぱつ げんぼく かわ ち そ じごくず みず
 70年前の朝、一発の原爆によって川は血に染まり地獄図となり、水を求めた溺死体が折り重なって川面が膨らんだように見えたど、被爆して生き延びた体験者は語っている。私はベンチの設置場所に原爆ドームがしょうめんに見える川べりを選んだ。それは一人でも多くの若者たちがせんそうのこんせきをむねにきざこうきゅうへいわねがあらほからで、また多くのお年寄りにもすわってもらいぎせいしゃのめいふくを祈って
 いただき たい 念いからである。

< 寄附されたベンチ >



運命の人生

たかの ふみこ どうじ さい
高野 富美子 (当時 15才)

着の身、着のまま帰国

わたし ちょうせん けいじょう う ちち ちょうせんてつどう
私は、朝鮮の京城（ソウル）で生まれました。父は、朝鮮鉄道の
機関士でした。

ぼつぼつ、戦争の兆しがあった頃です。「大東亜戦争」が始まったの
は、私が小学校4年生のときでした。

りょうしん にほん ひ あ きき しょうわ ねん きき み きき
両親が日本に引き揚げようと決めて、昭和18年に着の身、着のまま、
汽車で釜山に出て、関釜連絡船で日本に着きました。

われきき ほんどう し きこく
我先にと、本当に死にもものぐるいの帰国でした。

そして東京に着き、ようやく間借りをして、私と7才の弟は国民
学校に転校することができました。

しかし、その頃には、「欲しがりません。勝つまでは」と、勉強どこ
ろではなく、田舎の稲刈りの手伝いをしたり、校庭に芋を植えたり。食
べるものもろくになく、だんご汁ばかり食べて頑張っていました。

となりぐみ おや ぼうくうえんしゅう たけ くんれん
隣組の親たちは、防空演習や、竹やり訓練などしていました。

ときどき ビー ばくげきき あお そら と み
時々、B29爆撃機が、青い空をキラキラと飛んでいるのが、見られ
るようになりました。

しょうわ ねん わたし やまなかこうじょ ねんせい がくとどういん で
昭和18年、私は、山中高女の1年生になり、学徒動員に出るようにな
りましたが、軍の命令で建物疎開（類焼対策）に当たり、東京を離
れることになりました。

この時、母方の田舎ということで広島に行くことになり、父は広島
の三菱造船所に勤めることになって、社宅に入ることができ、親子4人水
入らずの生活が嬉しかったです。

わたし じょがっこう てんこう おとうと こくみんがっこう い
私は女学校に転校し、弟も国民学校へ行くことになりましたが、

がくどうそかい
学童疎開とかで、また離れて暮らすことになり、私も、動員で兵器廠
ひふくしょう りょうまつしょう い
や被服廠、糧秣廠へ行きました。

そして、女学校3年生になってからは、広島ひろしまの吉島よしじまの倉敷航空製作所くらしきこうくうせいさくしょ
で三交代さんこうたいの仕事をしごとしていました。

ピカドン

いよいよ、8月6日の朝です。

あつ なつ あさ しゅっしん
暑い夏の朝、出勤しなければならぬのに、ろくに食べるものもなく、
ゆうべ くうしゅう あたま いた いえ なか すわ
昨夜の空襲で頭も痛く、家の中で座っていました。弟も疎開か
かえ
ら帰っていたので、母も久しぶりの心安らぐひとときでした。

その時、8時15分、「ピカッ」と強烈に光りました。そして、「ドカン」と轟音ごうおんがあり、母は押入れから布団を出して、3人で頭からかぶり
ました。

ガラंगाチャガチャと…何事かと本当にビックリしました。少し落ち着いて外を見ると、爆風で家の中はメチャクチャ、ガラスも飛び散っていました。

うす暗く、もくもくと巨大な雲が立ち上がっていました。近所の人は、「ガスタンクの爆発かな」と言っていました。

そのうちに、兵隊がとんで来て「市内は火の海じゃ、新型爆弾じゃ…」と言っていました。空襲警報も解除だったのに、なぜ？と、本当に訳のわからない私たちでした。

家の場所が爆心地から5キロメートル離れていたため、助かったのです。

私も、仕事に出たら火傷か、死体かと考えると本当に恐ろしいことです。しかし、運命うんめいというのか、その日に限って仕事を休んだために、助かったのです。

そのうちに、地獄の底から出てきたような、裸で火ぶくれした大傷の人たちが、ぞくぞくと逃れて来ました。

「怖い怖い、水を飲ませて…」と言って、バタバタと倒れて、そのまま亡くなってしまいますのです。

体育館に筵を敷いて寝かせてあげて、火傷に油を塗ってあげるだけです、私たち元気な者は、兵隊さんも一緒に、その人たちを助けるのに大変でした。

街には毒があるから行くなと言われて、こちらに来られる負傷者のお世話をしていました。

ゴミのように焼かれる死体

亡くなった人たちは、ゴミのようにトラックに積まれて、校庭の隅で焼かれていくのです。人の焼かれる臭いや、皮膚の腐った臭いで、本当に地獄のような毎日でした。

川の中は、遺体でいっぱいでした。火傷の身体にハエがたかり、「ウジ虫」がいっぱいたかっています。どうしてあげることもできません。私たちも、いつまた空襲になるかもわからず、生きた心地のしない毎日でした。

9日には、長崎にも「新型爆弾」のニュースがあり、戦争の恐ろしさを実感しました。

8月15日、ラジオを聴くようにと連絡があり、皆で聞きました。天皇陛下の終戦の言葉でした。私は、「あゝよかった」と思いました。

しかし、もう少し早く降伏していれば、大学生が、ゼロ戦特攻隊で体当たりして若き命を散らすこともなく、「ピカドン」でこんな目に遭うこともなかったのにと、本当に悔しい思いをしました。

私は、学校も全滅だし、亡くなった生徒も多く、とうとう3年で中退して、三菱造船に働きに行くようになりました。

金もなく食糧もなく、苦しい生活をしました。昭和36年に大阪に働きに来ました。

被爆者も高齢化しました。苦しみながら、家族に看取られることも

なく亡^なくなった方々^{かたがた}のご冥福^{めいふく}をお祈り^{いの}するとともに、核兵器^{かくへいき}のない平^{へい}
和^わな世界^{せかい}を祈り^{いの}、語り継^{かた}いでいく使命^つがあると思^{しめい}います^{おも}。

悪魔の原爆

永野間 千栄子 (当時 10才)

8月9日、長崎の原爆投下で、悲劇は倍加されたと思います。

戦争が始まってから、どんどん食糧事情が悪くなり、日々の食事も満足にできなくなってきました。

そんな中、私は小学校5年生の夏休みでした。

長崎に悪魔の原爆が投下され、その瞬間から、数多くの被爆した人々の苦しみが繰り広げられました。

町内は火災を起こし、隣家まで延焼し、幸いに類焼は免れたわが家も、爆風のために傾いてしまって、とても住める状態ではなくなってしまいました。

幸いに父母、兄妹7人に目立った怪我もなく、まずまず無事だったので、家族全員、16キロメートルほど離れた伯父の家に厄介になることになりました。

伯父の家にも家族がいるので、住居に住むことができなくて、百姓家の納屋に住まわしてもらうことになりました。

真夏の暑い中、狭い納屋で7人暮らしをした、あの苦しみは今でも背筋が寒くなる思いです。

戦争がなければ、原爆の被害を受けなければ、苦しみの少ない暮らしができたろうにと、今でも戦争を恨めしく思い出します。

今年で戦後70年の年が巡ってきました。せっかく「70年」も戦争にも紛争にも巻き込まれずに日本は憲法の下に生きてきました。

この平和が永く続くように願って止みません。

二度と戦争を起こしてはならないと、子々孫々まで伝えていきたいと思って、暮らしています。

被爆させられた家族

榎山 葵子 (当時 胎内被爆)

原爆が落とされてから70年が過ぎました。

私は胎内被爆で、被爆時の体験はありません。私の知っていることは、母や叔母から聞いたことだけです。

それで今回は、母の一家のことを書いてみたいと思います。

母は、広島市の段原に生まれ、8人兄妹の2番目です。

祖母は、8人の子供が1人も亡くならず大きくなったことを皆に羨ましがられていたそうです。

しかし、終戦の年、早稲田大学理工学部卒業とともに入隊していた長兄が南方で戦死。飛行機の設計をしていた弟も病死。

そこに、この8月6日です。

私の母は、その前年、呉線の安芸津というところに嫁いでいました。

そして、下の2人の弟も疎開させて面倒をみていました。

8月6日、広島市内には、母の両親と、母の2人の妹と一人の弟がいたのです。

下の妹は、市女の1年生で、勤労奉仕で爆心地にいたため亡くなりました。

喉が渴いたのでしょうか…。川のほとりで亡くなっていたそうです。

1年間で3人の子供を亡くした祖母は、(晩年、私が知る限りですが)戦争の話はしませんでした。テレビなども、戦争の場面になるとチャンネルを変えていました。

広島の家は、周辺の家屋がほとんど倒壊して残っていなかったのに、しっかりと残っていたために、被爆後も皆そこに住んでいました。

祖父(72才)は胃癌で死亡。母のすぐ下の叔父も52才で病死。

その後、祖母は94才まで長生きしましたが、もう1人の叔父(58才)は甲状腺癌で死亡。もう1人の叔母も、62才で病死しました。

この叔母は被爆直後から体調が悪く、そのためか一生、独身で過ごしました。この叔母に被爆直後の広島のことを聞いたことがあります。お腹から腸が出ているのに、話をしていた近所の小母さん。皮膚が垂れ下がった人々。

原爆記念館の展示より、ずっと酷いと言っていました。

そして私の母です。何度も広島の実家に行って、入市被爆をしました。そして、50才の頃に子宮癌にかかり、亡くなる前に、大腸癌を患いました。

母は、二度も「癌」を患ってから、「被爆者健康手帳」の交付を申請したようです。でも、母は、「手帳」を手にするこなく亡くなりました。葬祭料が下りたことによって初めて、「手帳」の申請が通っていたことを知りました。

母は、亡くなる前、私も胎内被爆なので、「手帳」をもらえるようなら、取っていたほうが良いからと言っていました。

自分の兄弟や自分の癌のことをいろいろと考えていたのかもしれませんが。

その母も74才で亡くなり、もう20年近く経ちました。

母の8人の兄妹で残っているのは、一番下の75才の叔父だけです。母の兄妹は驚くほど短命でした。それが原爆のせいだけとは言えなくても、何らかの影響はあるはずで。

でも、私たちは、忘れてはいけません。「被爆したのではありません、被爆させられたのです」。戦争で大事な長男を亡くし、原爆で女学校1年の娘を亡くした祖母は、一生、戦争のテレビは見ませんでした。

二度も「癌」を患った母は、原爆のことをほとんど話さず、亡くなる少し前まで、「被爆者健康手帳」の申請をしませんでした。

わたしも大きな変化がありました。

7年前に乳癌になったのです。

そして、手術・放射線治療を経て、ホルモン治療となり、やっと一息
ついている時に、甲状腺が腫れていることに気がつきました。検査と
なりましたが、そんなに深刻には考えていませんでした。

でも、その後、甲状腺癌と告知され、乳癌の手術から2年半で、甲状
腺の全摘手術をすることとなりました。

私は、一生、甲状腺の薬を必要とする身になったのです。

甲状腺の手術をしてから4カ月くらいして、東日本大震災がありま
した。福島原発事故の中継を、被爆線量のことなどを、複雑な気持
ちで見っていました。

8年前に、あの手記(「ヒロシマ・ナガサキ8月のあの日 寝屋川・被
爆者からのメッセージ」)を書いていた私は、まだまだ呑気な私でし
た。今も近いうちに乳癌の検診と甲状腺の検診に行かなければなりま
せん。

その度に、不安な気持ちはありますが、頑張っ生きていければ…と思
う気持ちは強くなっています。

戦後70年を想う

もり れいこ どうじ さい
森 令子 (当時 7才)

わたし かぞく りょうしん ふく にんかぞく
私の家族は両親を含む9人家族でした。

ちやうけい たいへいようせんそう ちやうへい かいぐん へいし ひがし かい せんし
長兄は太平洋戦争に徴兵され、海軍の兵士として東シナ海で戦死しました。

じけい りくぐん ちやうへい ぶじ きかん ごからだ
次兄は陸軍へ徴兵されていましたが、無事に帰還。しかし、その後体が病んでおり、高熱による発作や結核を併発し衰弱していき、最後には心臓発作により若くして亡くなりました。

さんなん あに ぼくしんちちか しごと どうじつ し
三男の兄は爆心地近くにて仕事をしていましたが、当日たまたま市外への仕事に交代になり離れていたため、原爆による爆死を免れました。後々、普段仕事をしていた会社付近へ行くと建物も無く瓦礫の山となっており、働いていた兄の同僚たちはおそらく全員亡くなったものと思われました。

あね けっこんご ながさきしがいち きよ かま ぼくしんち すこ
姉は結婚後に長崎市街地に居を構えていたものの爆心地よりは少し離れており、原爆投下時は戸外で背中に物凄い痛みを感じ、振り返ると長崎市内の空が赤黒く染まっており、表現するなら噴火する火山の火口を見ているような状態で、「きっと何か大変な事が起こったのだと感じた。」と話していました。

わたし どうじ さい ながさきしどうざまち ぼくしんち ほど す
私は当時7才、長崎市銅座町(爆心地より3.5キロメートル程)に住んでいました。

げんぼくとうか ひ わたし あに よんなん さい いもうと さんじょ さい いっしょ じたく
原爆投下の日、私は、兄(四男13才)と妹(三女4才)と一緒に自宅から離れた場所で川遊びをしていましたが、昼近かったので母に戻るようになわれ、遊びをやめて、自宅付近の銅座川浴いの遊び場へ帰っていました。兄と妹は2人で小屋の中で遊んでおり、私は大きな柳の木の下で川を眺めて座っていました。その時に突然、何も見えない程

の強烈な青白い光に包まれ、兄妹が遊んでいた小屋まで投げ飛ばされて意識を失いました。その後気が付くと、両親、兄妹と一緒に近くにあった防空壕の中にいました。そのうちに、近所の人たちが次々にひどく取り乱した形相で飛び込んできました。頭や顔にガラスの破片が刺さり血まみれの同級生や、いつも挨拶をしている近所の人たちがひどい有様で入って来るのを見て、今までにないとんでもないことが起こったことだけは子ども心に感じ、すし詰めめの防空壕で、大きな恐怖と緊張感で息が詰まりそうだったのを覚えています。その後、山にある防空壕に移り、しばらくして自宅へ戻りました。

しかし、その当時のことは恐怖心以外ほとんど覚えておらず、母は、私が薄暗い防空壕の中でじっとしており、絶対に外に出ようとしなかったと後に話しておりました。

終戦の日、もう逃げ惑ったり怖い思いをせずに済むのだと分かり、何を思うより、とにかく安堵したのを覚えています。

しかし、戦後、恐怖はじわじわと足元を脅かしました。

原爆投下時に市内にいた近所の人々が大きな外傷もないのに次々に亡くなっていったり、敗戦国の人間を非人道的に扱っているとの尤もらしい噂など、私にとっては戦後も恐怖の日々が続きました。

三男の兄からは市内の川でたくさんの人々が折り重なるように亡くなっていた話を聞き、父からは、亡くなった人々を1カ所に集めて夏の暑い最中に火葬をする手伝いの時の話などを聞いて、恐怖はどんどん大きくなっていきました。

自宅に帰って暫くした頃、私の体に異変が起こりました。激しい下痢が1カ月も2カ月も続き、母は目に見えて衰弱していく私を心配し、物資の少ない中でいろいろと手を尽くしてくれたことを覚えています。またその頃より皮膚が太陽光に弱くなり、少し日に焼けただけで赤く腫れて、さらにその部分が腫れあがり1カ月も外に出られなく

なるようなことがよくあり、結婚前まで続けました。

また結婚後、2010年と2011年に子宮体癌と肝臓癌の切除手術を受け、現在、経過観察中です。

今、当時を振り返ると、いろいろな偶然が重なって私たち家族が生き残ったのだと強く感じます。

原爆投下時、川におり裸で遊んでいたら兄妹3人は今のよう元気じゃなかったかもしれません。三男の兄は普段通りの場所で仕事をしていたら、おそらく爆死していたでしょう。

偶然に生かされた者として、あの記憶を後世の方へお伝えする機会を与えていただき感謝しています。

戦後70年を迎え、二度と思い出したくない記憶を書き綴りましたが、この体験を思い出すのはこれを最後にしたいと思います。この記憶は今でも私を7才の当時へ強制的に戻し、辛く苦しく怖かった頃を思い出させるものですから。

戦争は、築き上げたものを全て壊し、更に人の心を傷つけるだけでなく命をも奪うもの。それに意味を見出すことは私にはできません。

終戦の頃の「あの日」

やまかわ よしひで どうじ さい
山川 美英 (当時 4才)

戦時下の大阪

1945年8月6日の「あの日」は、私にとって忘れられない日である。

いったい何がどうなったのか、小さかった私はよく覚えていないが、断片的な記憶は鮮明である。

私は1941年1月、大阪で生まれた。父は北区(現・都島区)で靴店を営んでいて、多少体が虚弱で、当時はまだ召集されておらず、都島南通りの警防団長をしていた。

それでも、終戦間近の頃に丙種合格で召集され、九州博多の部隊に配属された。まだ父が店をやっていた頃に、省線電車(現・大阪環状線)の北側の貨物線ガードをくぐったところの「喫茶店」で干しバナナをよく食べたのを覚えている。

戦況が悪くなる頃に、兄2人は集団疎開で出て行き、母と私と妹の3人が残った。近くには防空壕があり、何家族かの人たちがそこに出入りしていた。私には結構広いところだったと記憶している。

1945年、いよいよ激しくなった空襲に対処するため、省線電車脇の家屋から、順々に家を壊すことになって、残っている近所の人たちが太いロープを家にくくりつけ、引っ張って家を壊す作業をしていたのを覚えている。というのも、電車が走る土手の上までロープを伸ばして皆で引っ張っていて、電車の運行を止めさせるという騒ぎがあり、母が近所の人たち数人とともに巡査に引っ張られて一晩帰ってこなくて、何か寂しい気分になったことを覚えているからだ。防空壕の中の人たちが「心配せんでいい」と言って、何やら食べさせてくれたのを覚えて

ている。今でいう「列車往来妨害罪」というものだろう。

焼け出されて広島へ

そうこうしているうちに、自分たちの家も空襲で焼け出されてしま
い、母は私と妹の手を引いて大阪市内の親類の家を尋ねて歩いたが、
どこも焼けてしまって、身を寄せるところがないので、父の実家であ
る広島県安芸郡天応町に行くことにしたらしい。

行李一つを持って汽車に乗って、広島をめざした。いつのことだっ
たかよく覚えていないが、広島に向けて走っている列車に爆弾があた
り、後ろのほうの客車が燃えて、仕方なく最寄りの岡山駅に停車して降
ろされた。列車が燃えているドサクサに、母の唯一の荷物だった行李が
盗まれて途方に暮れたというのを、戦後もだいぶ経った時に母から聞
いた。

岡山駅に2日ほど留っていたが、「ここも危ない」と言われて、駅の
北側にある小学校に避難した。畑や校庭に焼夷弾というのがやたらと
落ちてくるのを、学校のすぐ近くの小川の中から見ただのが記憶に残っ
ている。4日ほど岡山にいて、広島行きの列車が出るというので、そ
れに乗り、天応町の父の実家に着いた。海岸の近くの大きな家で、砂浜
で水遊びをしたり、カボチャの種（干して火で炒ったもの）を食べた
り、時には広島市内へぶどう狩りに行ったりしたことを覚えている。
天応町駅の近くの国道寄りに、広いトンネルが汽車の線路に平行して
掘ってあり、そこにも何度か入ったことを覚えている。

母子被爆

原爆が落とされた「あの日」、町に動員の指示が来て、何人かが広島
市内へ行くことになった。母は妹を残し、私を伴って、クワか何か
を持って朝早く出かけた。母の話によると、「作業」（建物疎開で倒壊
させた家屋のガレキを取り除く）の一時休憩の時に爆弾が落とされた。
晴れた空に飛行機雲を見つけて「あっ、ひこうきや」と思った瞬間、私

は何もわからなくなった。母も短時間意識を失ったらしいが、すぐ気がつき「ここを逃げんといかん」と考えたそうである。

私は気絶していたのだが、母は、息子の私が「死んでしもうた」と思った。母も火傷をしているし、近くの人たちの姿はよくわからないが、倒れている人や血を流して歩いている人などがいて、「とにかくここから逃げる」のに必死だったらしい。でも私が「死んだようになっていた」ので、担いで逃げようと思ひ、しかし火傷もあるので、とにかく火のないところへと引きずっている時に気がついたらしく、それからのことはよく覚えている。潰れた家の上や瓦の上を、母は地理に不案内なまま走った。市電の骨だけが残っているもの、瓦の上を永い間走り走りに走ったこと、トラックに乗せられて降りたところで、おにぎりか何かを食べたことなど、よく覚えている。

私たちが作業をしていたところは、京橋川にかかる鶴見橋の西詰めで、比治山の近くであった。そこからどこをどんなふうに移動したのか、昼頃になって、救援のトラックに乗せてもらい、岩国方面へ行った。それも初めはどこを走っているのか母もわからず、かなり走って停車したところで聞いてわかった。私たちは「呉方面」に帰らねばならない」と言い、再び広島へ入って、呉方面に行くトラックに乗り換え、父の実家に戻った。私は幸い何のキズもなかったが、母は火傷がひどいので、町内の人たち数人と川の近くにあった「診療所」(あとで町役場と知った)で手当を受け、数十日入院をしていた。

父帰る

父が軍隊から戻って来たので(父は偶然、天応の実家にいったん顔を見せてから大阪に帰る予定だったらしい)、親子して焼けた大阪に戻った。

兄2人は、すでに疎開先から戻って来て、焼けた家のあとにバラック生活をしていた。父は急遽、消失を免れた狭いアパートを借り、親子

6人が生活することになった。

戦後、私が被爆者であることを知ったのは、中学1年生の時である。その頃父は、体の調子が悪く、もとの靴屋をする気もなく、もちろん道具や何やも焼けてしまっていたので、仕方なく、進駐軍の払い下げ品を売ったり、「パチプロ」などをしていた。母もいろいろな内職をして、その日暮らしで戦後の苦境を乗り切った。中学1年生の時、京大放射線研究グループから、北野病院へ来るようにとのハガキが届いたので、母も、私が広島で「原子爆弾におうた」ことを言ってくれた。私はそれまで、特別の病気になるという記憶がなかったが、毎年夏になると吹き出物（「でんぼ」と言っていた）が首やお腹、背中にかけてたくさんできて、「タコの吸い出し」を塗っては母に「芯」を取ってもらって、痛い思いをしていた。3～4年続いたのではないかと思うが、いずれにしても「被爆した」ことを担任の福田先生に相談したことがある。学校でも戦争のことは習っていたので、理解はできたが、自分が当事者であることを知り、少しショックを受けた。

世界平和のために

戦後、家族は、貧しさを強制された生活を送った。その日のご飯もあるやなしやの状況だったので、子ども心に「自分も何かしなくては」と考えたものである。

母は火傷の痕を隠すようにして、誰にも「被爆した」ことは言わなかった。私たち家族は、戦後の厳しい生活を体験し、中学校を卒業すれば働きに出るのが当然と考えていた。兄も私も夜間の高校に学び、家計を支えた。もちろん、小学校の時も、中学校の時も「アルバイト」をして働いた。レンガや屋根瓦工事の手伝い、鉄屑や焼け跡の機械の解体・回収、左官や大工の手伝い、内職の手伝いなどである。今思うと、貴重な人生経験をしたと思っている。

戦後70年が過ぎた今日でも、ついこの前まで元気でおられた被爆者

が急に死に晒される場面に遭遇するたびに、「自分は果たして大丈夫だろうか」と弱気になることがある。

そして、あの戦争の責任について未だに何の反省もすることなしに、あわよくば現憲法を変えて、再び武力で「平和を守る」などという意見もあり、「一体あの戦争と原爆被害は何だったのか」と自問することがある。

しかし昨今の状況は、多くの善意ある人々の運動のおかげで、「核兵器は二度と使わない」そして「核兵器は廃絶可能」との見通しも開けてきている。広島、長崎の市長や世界中の「平和首長会議」の取組も歩を進めている。今や「核兵器のない世界」という課題は世界の常識となりつつある。毒ガス、細菌兵器、地雷やクラスター弾などの使用禁止が世界的に合意されている中であって、核兵器がなお、使用可能という世界こそ非常識なのである。

2014年4月、マーシャル諸島共和国政府が国際司法裁判所に核兵器保有国は、核兵器の不拡散に関する条約（NPT）第6条に違反していると提訴した。2015年4～5月にニューヨークの国連本部で開催されたNPT再検討会議で、核兵器保有国（世界中から見て極めて少数）は、みるべき成果を果たすべきだと強く言いたい。

今、多くの被爆者が、日本中の平和愛好の人々と連携して、病苦をおして原爆症認定裁判にも立ち上がっている。これらの様々な運動や取組に励まされて、私も微力ながら力を尽くしたいと考えるこのごろである。

被爆70年目を迎えて

やました
山下 しのぶ (当時 2才)

ねん がつ エヌピーティーさいけんとうかいぎ おこな
2015年4～5月、NPT再検討会議の行われているニューヨークの
こくれんほんぶ かたがた しえん え い き
国連本部へ、たくさんの方々の支援を得て、行って来ました。いろい
ろなひとびと で あ あらた わたし たちば かんが
ろな人々と出会い、改めて、私たちの立場を考えました。

わたし さい げつ とき ひろしま ひばく がつ か あき
私は、2才5カ月の時、広島で被爆しました。8月6日の朝、「カ
タカタ」とっていた歩行のための手押車で遊んでいました。爆風
より、げんかん ふ と ぐらふ いえ で き ちち とも げんかん したじき
より、玄関に吹き飛ばされ、家から出て来た父と共に、玄関の下敷に
なりましたが、じてんしゃ が あった おかげで、けが ありませんでした。

はは いえ いえ はき かお きず お はは しょうわ ねん
母は、家と家とに挟まれて、顔に傷を負いました。母は、昭和26年
に亡くなりましたが、こうしん した きず き おきな わたし おぼ
に亡くなりましたが、口唇の下の傷は消えることなく、幼い私も覚えて
います。はは げんばくしょうがいちようさいいんかい エービーシーシー かいぼう き
母は、原爆傷害調査委員会（ABCC）で解剖されたと聞いて
います。

けっか ほうこく げつ たいじ おとうと
結果は報告されませんでした。おそらく8カ月であった胎児（弟）
と一しょに、いっしょ ないぞう ひょうほん おも
と一緒に、内臓は標本にされたのだと思っています。

わたし ひばくご おおさかふ か きしわだ ちち じっか そかい
私たちは被爆後すぐ、大阪府下の岸和田の父の実家に疎開しました。
きんじょ いしゃ どうじ きちよう ちゅうしゃ げつう
近所のお医者さんが、当時としては貴重なビタミン注射を1カ月打っ
てくれたそうです。いま わたし なにごと かげ
今、私に何事もないのは、このお陰ではないかと
おもっています。

ちち さい たぞうきふぜん な せいぜん たいないひばく いもうと
父は、77才で多臓器不全で亡くなりました。生前、胎内被爆の妹が
げんばくしょうとうしょう よ い
原爆小頭症でなくて良かったと言っていました。いま わたし こ
もが、まご う たび こころ うち なにごと いの
もが、孫が産まれる度に、心の内で何事もないことを祈っています。

ひばくしゃ わか わたし さい わたし い
被爆者としては若い私でも、72才となりました。私たちの生きて
あいだ せかい かくばくだん すべ な いま
いる間に、世界から核爆弾が全て無くなることあるでしょうか？今
ねが いってん
の願いはこの一点につきます。

参 考 資 料

- ひかくへいわとしせんげん
・ 非核平和都市宣言 34 ページ
- へいわとう
・ 平和の塔 34 ページ
- ねやがわしし
・ 寝屋川市誌 35 ページ
- へいわ
・ 平和のバラ 36 ページ
- ごくせつめい
・ 語句説明 37 ページ

非核平和都市宣言

しょうわ ねん がつ にち
昭和58年3月25日

ぜんせかい こうきゅうへいわ じんるいきょうつう がんぼう しみん ほこ ねが
全世界の恒久平和は、人類共通の願望であり、市民の誇りと願いをこ
めた「寝屋川市民憲章」では日本国憲法の精神にしたがい、その崇高な
りそう こうきゅう へいわ ねんがん
理想のもとに恒久の平和を念願している。

わが くに せかいゆいいつ かくひぼくこく かくへいきはいぜつ ぜんめんぐんしゅく せつきょくてき
我が国は、世界唯一の核被爆国として、核兵器廃絶と全面軍縮に積極的
やくわり は へいわ じち せいしん もと あか
な役割を果たすべきであり、平和なくしては、自治の精神の下、明るく
ゆた い ほしょう
豊かに生きがいのあるまちづくりは保障されない。

ねやがわし しみんけんしょう ほこ せきにん こうきゅう へいわ あい
よって、寝屋川市は市民憲章の誇りと責任をもって恒久の平和を愛す
ひと す くに せんそう かくへいきはいぜつ もと
る人びとの住むまちとして、あらゆる国の戦争と核兵器廃絶を求め、こ
こに「非核平和都市」を宣言する。

平和の塔

しみん こうふく こうきゅうへいわ ねが へいせい ねん ねん はつほんまちこうえんない
市民の幸福と恒久平和を願い、平成3年（1991年）に初本町公園内に
こんりゅう へいわ どう
建立された平和の塔。



寝屋川市誌

当地の戦災

昭和19年から始まった空襲は翌20年に入って激化し、日本の重要都市はほとんどその洗礼を受けて、焦土と化した。当地方へもこの年6月15日、米爆撃機29が淀川沿岸を北上し、途中各所に焼夷弾を投下した。

仁和寺の中西ベアリング工場が軍需工場なのでこれを投下目標としたらしいが、弾ははずれて仁和寺から葛原のたんぼの中に多数落ち、仁和寺では東光治方に12発、八畳一間を焼いたのみで消し止めた。また、黒原の乾潔方は全焼し、葛原では中川喜次郎、松浦竹次郎、浅田秋造と集会所が全焼、外に北口兼吉方は屋根のみを焼いた。

木屋の淀川左岸土地改良区のでき上がったばかりのポンプ場が焼けた。田井では南与右衛門方付近の堤防に落ち、また、中木田から神田飛地(現京阪車庫)に至る中間の水路付近に1トン爆弾が落下して大穴をあけた。その時、付近で牛耕中の山下老人(神田)が爆死し、牛だけが主家にたどりついて人々の涙をそそった。

走行中の京阪電車も停車して乗客は堤防に避難中、学生2人が負傷した。また、仁和寺阪口利一の娘は守口の松下病院で退院準備中を飛行機からの銃撃を受けて死亡した悲劇もある。都会と異なり、当時まだ農村であった当地は戦災といってもこの程度で、都会の悲惨な被害に比べべくもない。

(昭和41年11月に発行された寝屋川市誌(334ページ)より抜粋)

※ 名前にふりがなはふっていません。

平和のバラ

寝屋川市では、非核平和を祈念し推進する取組の一つとして、戦後60年となる平成17年度より「平和のバラ」普及事業を行っています。

この取組は、平和への祈りが込められた「平和のバラ」を市民の皆様
に育て慈しんでいただくことを通して、恒久平和と幸福の尊さを改めて
考えていただくことを目的に実施しています。

また、平成23年度からは、市民の皆様より寄せられた平和のバラ
写真展を開催しています。

ピース

第二次世界大戦後の昭和20年
(1945年)に平和と希望の願い
を込めて、英語で「平和」を意味
する「ピース」と名付けられました。



アンネのバラ

戦争の犠牲になった少女アン
ネ・フランクの父親であるオット
ー・フランクさんが、娘の平和を
願う心をバラに託し名付けられ
ました。



上記以外にも「二重の喜び」という意味の花名に、平和と人権の尊重され
るまちづくりへの希望を託した「ダブルディライト」などがあります。

語句説明

* **N P T (Treaty on the Non-Proliferation of Nuclear Weapons)** : 「核兵器の不拡散に関する条約」。核兵器保有国の増加を防ぐこと（核兵器の拡散を防ぐこと）を主な目的とした条約。1970年（昭和45年）に条約として正式に発効された。

* **N P T再検討会議** : 核兵器の不拡散に関する条約（N P T）の運用状況（核軍縮や不拡散の進展など）を検証し、次の5年間の取組を決める会議。5年ごとにニューヨークの国連本部で開催される。

* **学徒動員** : 太平洋戦争下で深刻な労働力不足を補うため、生徒や学生が軍需産業などに動員されたことをいう。

* **学童疎開** : 戦時下で戦火の犠牲を避けるため、大都市の子どもたちを地方都市や農村に移住させたことをいう。

* **クラスター弾** : 容器となる大型の爆弾の中に複数の小型を搭載した爆弾。

* **呉軍港** : 明治時代に軍港として開港した広島県呉市にある港湾。1945年（昭和20年）3月9日の米艦載機約350機による呉空襲が開始され、以後7月まで波状的に大規模空襲が行われた。

* **黒い雨** : 原子爆弾投下後に降る、原子爆弾の炸裂時の泥や埃、煤などを大量に含んだ重油のような粘り気のある大粒の雨。

* **軍管区** : 旧陸軍で日本をいくつかの区域に分けた際の各管轄区域。1940年（昭和15年）には東部、中部、西部、北部の4軍管区に分けられ、広島には西部軍管区司令官部が置かれた。

* **ゲートル** : 西洋式の脚絆（脛の部分に巻きつけて覆った厚地の木綿・麻・革製などの帯）。

* **警防団** : 消防団と防護団を統合した団体。1939年（昭和14年）結成された。

* **原爆傷害調査委員会 (A B C C)** : 1946年（昭和21年）に原爆の人体への影響を長期的に調査するために、アメリカ合衆国が設置した機関。1975年（昭和50年）からは日米共同で運営することになり、(財)放射線影響研究所 (R E R F) として改組された。

*原爆小頭症：母親の胎内で大量の放射線を浴びたことが原因で、頭囲が小さく生まれ知能や身体に障がいがある病気。

*行李：竹や柳などを編んでつくられた葛籠の一種。衣類や身の回りの品の収納あるいは旅行用の荷物入れなどに用いられた。

*国民学校：初等科6年、高等科2年より構成され、皇国民（天皇の国の民）の基礎を鍛えることを目的とされた。

*舎監：寄宿舎を管理・監督する人。

*焼夷弾：人馬など焼殺し、市街、森林、兵器などを焼き払うために焼夷剤（発火性の薬剤）を装填した弾。

*ゼロ戦特攻隊：「ゼロ戦」は日本海軍の主力戦闘機「零（ゼロ）式艦上戦闘機」、「特攻隊」は太平洋戦争末期に海軍が編成した「特別攻撃隊」の略称。また志願した年若い航空兵が操縦するゼロ戦が、米艦艇に決死の体当たり攻撃を行う特攻隊を「カミカゼ特攻隊」と呼んだ。

*胎内被爆：原子爆弾投下時に、母親の胎内で被爆した人。

*大東亜戦争：アジア太平洋戦争当時の呼び名。

*建物疎開：空襲により火災が発生した際に延焼を防ぐ目的で、防火地帯を設けるため、行政機関がその対象家屋を選定し撤去すること。

*挺身：率先して身を投げ出し、困難な物事にあたること。1943年（昭和18年）には女子挺身隊が創設され、14才以上25才以下の女性は1年間の勤労奉仕が義務づけられた。

*入市被爆：原子爆弾投下後、救援活動や肉親捜しなどで被爆地に入り、残留放射線などで被爆すること。

*バラック：空き地や災害後の焼け跡などに急造で建設される建築物。

*ピカドン：原子爆弾のこと。「ピカッと（閃光が）光ったのち、ドンと爆音が轟いた（あるいは爆風が襲ってきた）」ことを表現した。

*B29：ボーイング社が開発した米国陸軍の爆撃機。

* **被爆線量**：「被爆量」とも呼ばれ、被爆した放射線の総量のことをいう。

* **平山都夫画伯**：日本画家。1930年（昭和5年）生まれ。旧制広島修道中学在学中、勤労動員時に被爆。戦後、日本画壇の最高峰に位置するといわれ、中でもシルクロードの風物を描いた作品は傑出していると評価が高い。

* **兵器廠・兵器補給廠・被服廠・糧秣廠**：軍需品を製造・修理する工場を「工廠」と呼んだ。（「廠」は壁で仕切られていない建築物。）広島の宇品港周辺には、兵器・弾薬などを製造する「兵器廠」、弾薬などの集積・補給を行う「兵器補給廠」、軍服や装具などを製造する「被服廠」、食糧を調達・保管・輸送する「糧秣廠」などが集中的に配置されていた。

* **丙種合格**：戦前の日本では20才に達した男子は、徴兵制度のもとで徴兵検査が義務づけられていた。甲・乙・丙の3段階にわたる合格基準が設けられていたが、甲種と乙種は現役に適する者、丙種は身体上の問題などで現役には不適だが、国民兵役には適する者とされた。しかし、太平洋戦争が悪化するなか、丙種合格者も戦地に召集された。

* **平和首長会議**：1982年（昭和57年）、国連本部で開催された第2回国連軍縮特別会議で、当時の広島市長の「核兵器廃絶に向けての都市連帯推進計画」を提唱し、広島・長崎両市長が世界各国の首長宛に賛同を訴えた。平和首長会議は、この計画に賛同する都市によって構成された団体。

* **防空演習**：米軍機の空襲に際しての避難訓練。

* **防空壕**：空襲の際に避難するために地中に掘られた穴。

あとがき

記録集作成にあたり、寄稿いただいた市民の方々には、70年前の辛い体験を思い起こしていただきました。

発刊にあたり、寄稿いただいた貴重な体験談の意図を尊重する意味で、原則として、修正は行っておりませんが、読む方に解りやすいよう補足等を加えた箇所があります。

「戦争の悲惨さ」と「平和の尊さ」を次世代にしっかり語り継いでいくことは、今を生きる我々の責任であり、寝屋川市は、今後とも、世界の恒久平和と核兵器廃絶の実現に向け、市民の皆様とともに取り組んで参ります。

戦後 70年平和祈念事業
戦争の記憶・次世代への恒久平和の継承
～市民が語る戦争・被爆体験記録集～

2015年（平成27年）7月

編集・発行 寝屋川市人・ふれあい部 人権文化課

〒572-8555 寝屋川市本町1番1号

印刷 株式会社フクダP. R. 印刷

印刷費用 本書の作成費用は1部あたり128円です。

